

< 国内情勢 >

## 石原莞爾研究 (後篇)

### 天才戦略家「石原莞爾将軍」の功罪

藤 井 巖 喜

(国際政治学者)

#### 敗戦後の指導者としての「石原莞爾」

石原莞爾は敗戦直後の時代に、新しい日本の指導者として脚光を浴びている。

このことは多くの人々が全く忘却していることだ。石原は満洲国を建国し、30年後の日米による世界最終戦争を夢想したが、その予見は完全に現実に裏切られてしまった。彼は1941年(昭和16年)3月には、予備役に追いやられている。すでに彼は昭和13年12月に、舞鶴要塞司令官に任ぜられ、この時から完全に軍中樞部からは外されていたのだ。完全な左遷人事である。

その後、敗戦まで石原は東亜連盟を中心に活動し、昭和19年には小磯国昭首相と会見し、その後も終戦工作に関わっている。しかし、国の運命を変えることは出来なかった。だが終戦と同時に石原の運命が大きく動き始める。

昭和20年8月22日の読売報知新聞に石原のインタビューが掲載される。

「大東亜戦争敗戦の原因は何か」との問いに、石原は言下に「国民道義の驚くべき低下である」と答えている。「国民は反省懺悔し、日本の国体に対する信仰に徹するべし。ただし敗戦は神の尊い意志であることを理解し、平和主義に徹底すること」とも訴えている。今後の国民生活の指標はどのようなものになるのか?との問いには、「1、総懺悔反省、2、大都市の解体、3徹底した簡素生活の断行」を訴えている。

また今後の政治に関しては、徹底した言論結社の自由を認め、特高警察や政治憲兵を廃止すること、また軍備を全廃し平和の先進国となることを提唱している。

また対外政策としては、東アジアの各国に対して、日本が帝国主義政策で臨んだ罪を心から反省する勇気をもたねばならないと答えている。

石原はこれ以外のところでも、英・米・ソの戦勝国に対しては全く謝罪の必要はないが、戦争で迷惑をかけたアジア諸国には謝罪すべきだと答えている。

昭和 20 年 8 月 11 日、皇族の東久邇宮内閣が成立した。

天皇は東久邇宮首相に対して、石原莞爾を内閣顧問に推薦している。

8 月 21 日、東久邇宮首相は使者を鶴岡の石原のもとに派遣した。東久邇宮は 8 月 23 日、首相官邸に石原を招き、内閣顧問就任を正式に要請した。石原は純民間人として働きたいからといって、就任を断っている。なお、東久邇宮首相の初の記者会見で、「国体護持、全国民総懺悔」を強調した。

首相の一億総懺悔という言葉は有名になったが、この言葉は石原の言葉を借用したものである。石原は自分の代わりに、2 名を内閣顧問に推薦している。

終戦直後の石原莞爾は、新生日本のリーダーとして、大衆の間で大きな支持を獲得する。9 月 3 日、石原の郡山での講演会には、なんと 1 万 5,000 人もが集まった。石原は「敗戦は神意なり」と強調した。

マイクもスピーカーもない会場で、石原は壇上から大声で

「日本は戦争には完敗したが、山河は滅びず、大和民族は生き残った。たとえ八等国まで下落しても、悲嘆するには及ばない。国民が奮起すれば日本の産業は著しく発展し、国民生活も自家用車が備わり、自動車氾濫時代になるに相違ない」と語っている。

終戦直後の日本中が焼け野原であったこの時代に、日本国民がみな自家用車を持ち、自動車氾濫時代になるなどという予測を誰がなしえたであろうか。石原の演説から、20 年後には、そんな時代が到来していたのである。

9 月 12 日には、山形県の新庄町最上公園で、石原の講演会が開催された。

参加者は 3 万人を超えた。この場で石原は「神が世界平和のため、反省する機会を与えてくれたことに感謝する。日本は素っ裸の丸腰になって、真の平和国家を、世界に先駆けて創造せんとする先駆的的使命を与えられたのである。…来年は、富士山麓の全国大会に 100 万の同志を集めよう」と訴えた。

その後も石原は全国各地で、東亜連盟同志の協力を得て講演会を開いているが、物不足…極端な交通事情の悪化にも関わらず、万単位の聴衆を集めている。

これはいったい、何故なのだろうか。それは既存のすべての指導者が、敗戦で完全に自信を喪失している時に、石原莞爾 1 人だけが日本人の名誉を守りながら、日本の行く道を示すことができたからである。日本民族の連続性を否定して革命的变化を説く者は多数いたが、彼らは所詮…時局便乗主義者に過ぎない。

名前の知っている指導者の中で唯一、石原莞爾のみが日本人の誇りとナショナリズムをなくすことなく新生日本の指針を、自信をもって示すことができたのである。

大衆は確固とした指導理念に飢えていたのだ。

占領軍便乗主義でない指導者は、石原ぐらいのものであったろう。

## 宗教的「絶対平和主義」の意味

世間から見れば、満洲国をつくった軍国主義者の石原莞爾が、突然、絶対平和主義に変身したことは、驚愕の対象でしかなかった。しかし、石原の内心を考えれば、合理的な帝国主義者から絶対平和主義への進化は、必然のものであった。

そもそも石原構想が現実になっていれば、まず日本は東アジアを統一し、30年後にアメリカと世界最終戦争を戦う予定であった。石原は戦争の基礎力は、経済力であることを見抜いていた。日本が蒋介石と和解し、アジアを統一することが第一段階。そして東アジア全体の生産力が南北アメリカ全体の生産力を上回った時に、日本が日米戦争で勝利する基盤ができると石原は考えた。その為には急いでも、30年の時間を必要とするというのが、彼の計算であった。

日本は決勝戦に進むどころか、準決勝でいきなりアメリカを相手にして敗北してしまった。しかも、最終兵器と思しき原子爆弾まで登場した。こうなると、その後の世界最終戦争も不可能になったと石原は考えた。いや、原子爆弾を投下しあうような最終戦争は何としても回避しなければ人類が滅亡してしまう。

ここまですれば、世界最終戦争のあとに訪れるはずだった絶対平和の時代を、日本人が捨て身で率先して実践するしかない。それが石原の信念であった。

これは誠に尊敬すべき美しい信念だが、現実の国際政治はそうは動かなかった。原爆は出来ても、原爆を使わぬ通常戦争は続いていた。日本が敗戦した後もアジアでの植民地の独立戦争は継続していた。日本が与えた灯火をベトナムもインドネシアもビルマもインドも、受け継いでいったのである。

植民地・独立戦争は勝利し、アジアでは陸続として独立国が生まれた。独立戦争は続いていたのである。また、核の恐怖のもとで朝鮮戦争が起き、ベトナム戦争も起きた。中東でも戦争は続いた。人類は核ミサイルという究極の破壊兵器を手にしたが、それでも戦争は止まらなかったのである。石原の世界最終戦争論が半分くらいの的中した形で、第二次大戦後の世界は米ソの対立時代となった。

そしてこの米ソ冷戦に敗れて、ソ連邦が崩壊したのが 1991 年、今から 30 年前である。しかしその後も、世界中で戦火がやむことはなかった。小規模な軍事紛争・ゲリラ戦争・テロは、やむことなく続いているのである。このように考えると**石原莞爾の絶対平和主義**は、明らかに現実的な基礎を欠いている。**絶対平和主義**も世界最終戦争同様に、彼の夢想であった。しかしそれは**石原の宗教的信念**が生んだ思想であった。思想家としての一貫性はあるが、国家を指導する理念としては、我々が採用できぬ類のものであった。

## 予言者「石原莞爾」

**石原**は恐るべき予見能力をもった人物であった。終戦直後に自動車氾濫時代などと、一体、誰が予想できたであろうか。こういったエピソードは、**石原莞爾**には山ほどある。1924 年、**石原がドイツ留学中**のことである。

日本から陸軍の高官がドイツを訪れた。**緒方勝一大将**一行が兵器視察のため、ドイツに立ち寄ったのである。この場で留学中の将校にもスピーチの機会が与えられた。席上、**石原**は「大砲などの視察よりも、**最優秀の飛行機の視察を最優先すべし**」と提言している。彼はすでに航空機第一主義を唱えていたのである。

航空機がやがて戦争の主役となり、来るべき戦争の命運を決する兵器になる、と**石原は予想した**のだ。飛行機は第一次大戦に初めて兵器として登場する。空軍戦略の先駆者・イタリアの**軍人デューエ**が「**制空論**」という主著を発表したのは 1921 年のことである。「**制空論**」でデューエは戦略爆撃の重要性を訴えた。

戦略爆撃が戦争の帰趨を喫することになると予言している。実際、日本は米軍の戦略爆撃により敗戦するのである。**石原**がデューエの著作を知っていたかどうかは不明である。しかし彼一流の予見力で、航空機が戦争の勝敗を決定する兵器になると予測していたのである。恐るべき予見力ではないか。

またこんなエピソードも伝えられている。1937 年（昭和 12 年）、**石原**は軍中央から外され**関東軍参謀副長**に転任する。この年の 3 月、少将に昇格し参謀本部作戦部長に就任していたのだが、7 月に起きた盧溝橋事件で一貫して戦線不拡大を唱えた為、陸軍内部で失脚したのである。関東軍参謀副長への転任は明らかに左遷であった。行った先では**東条英機参謀長**と衝突し、**石原**はさらに**倍流**に押しやられることになる。それはともかく、昭和 12 年 10 月、満洲に向かう途上、**石原**は故郷の鶴岡で両親に別れの挨拶をしている。

この汽車旅の折、**石原**が次のように語ったことを一人の記者が記録している。

石原は「日本は樺太も台湾も朝鮮もなくなる。本州だけになる。……それでよい。まだまだ日本の山河は開発できる。あの山の下に何かあるか未だわかっていないからなあ…」と独り言のように呟いたというのだ。だとすれば、これは8年後の日本の敗北を予見していたことになる。恐るべき先見性である。

この天才的な予見力にも関わらず、石原の最終戦争論や絶対平和論は極めて非現実的だった。しかし、それは石原の歴史における存在価値を否定するものではない。ただ彼の宗教心が前面に出てきた場合、彼の天才的な予見力を逆に曇らせてしまったとはいえないだろうか。彼は単に予見するだけではなく、満洲事変で示したように、極めて優れた軍事的リーダーでもあった。

石原は満洲国を造り、ソ連へのバッファゾーンとした上で30年力を蓄えて、アメリカと世界最終戦争することを夢想した。最終戦争のあるなしに関わらず、日本の安全を保つ為には、ユーラシア大陸に対する抑えが必要である。例え純粋に海洋国家として日本が発展する道を選んだとしても、朝鮮半島、シベリア、シナ大陸から発生する脅威に、いかに対応するかという国家戦略なしには、海洋国家としての発展もあり得ない。ただ、防衛ラインを対馬海峡に引くのか…8度線に引くのか…鴨緑江に引くのか…あるいは黒竜江（アムール川）に引くのか…で日本の選択は異なってくる。少なくともいえることは、石原が政治生命を賭けて反対したように、万里の長城の内側に入ることだけは、日本は慎むべきであった。

それは漢民族の3,000年におよぶ治乱興亡の舞台であって、日本民族が統治する類のものではない。日本が満洲国統治にとどまっていれば、必ずしも対米戦争を始める絶対的理由は存在せず、大東亜戦争を回避できた可能性は十分にあった。シナ事変絶対不拡大を訴えた石原の慧眼はやはり賞賛に値する。

石原が敗戦後唱えた「簡素な農耕生活と工業の両立、および大都市の否定」は現在、言うところの「エコロジカルな生活」（大自然の調和に則った環境循環型の生活）に他ならない。石原莞爾、やはり天才であり、今日なお吾々が彼から学ぶべき点はあまりにも多い。